

明日につなげる ―無償化裁判がもたらしたもの―

‘転換の契機に、

2013年の提訴から8年。依然、司法闘争が続く九州では、同様に最高裁へ上告中の広島とともに、裁判支援を行う2地域の市民団体が中心となり、最高裁へ公正な判断を求める署名活動を展開している。判断を待つしかない現況で、弁護団のメンバーたちもまたそこに力を結集させている。他方で弁護団では、異国の地で在日朝鮮人自らが育んできた民族教育という学びの場を、今後長いスパンでいかに確立していくのかについて、学校関係者たちと共に考え、行動を模索する日々だ。

九州弁護団（下）

『時間ばかりはなかった

弁護団立ち上げ当初から携わる安元隆治弁護士は、金敏寛弁護士（九州弁護団事務局長）と弁護士登録した年が一緒のいわゆる同期の間柄。金弁護士の誘いに二つ返事で参加を決めた九州弁護団の活動について、「これまでの弁護士人生の中で最も大きく、最も長く担当した事件」だと述べた。実は同氏、亡くなった服部弘昭弁護士の直属の弟子で、2週間に1回行われる弁護団会議の場所も、そのほとんどが、2人が所属する法律事務所で行われてきた。

「事務所の創設者・谷川宮太郎さんが、朝鮮学校を支える会に携わっていて、服部先生は若い頃、谷川先生から『朝鮮学校の活動は君が引き継ぐように』と言われ、活動するようになったと、ご本人から聞いている。とにかく忙しい方で、相当関わっていることを普段は知りえなかった（安元弁護士）

生前、多忙なこともあったが、または本人のスタイルがそうだったからか、朝鮮学校を支える活動については多くを語らなかったという服部弁護士。安元弁護士は、そんな師匠の「知りえなかった」姿を弁護団活動を共にすることで知り、活動の大切さもまた実感していった。

とりわけ、控訴審の最終局面となった第3回口頭弁論（20年2月14日）の場。一審以降、2回目となる意見陳述に立ち「来たるべき共生社会に向けた求めの判決を、福岡から求めます」と裁判官に対し訴えた安元弁護士の姿は、傍聴した生徒や同胞たちが自然に拍手を送るほど、この問題に弁護士として、また一人の人間として向き合ってきた同氏の強い思いを印象づけるものだった。

朝鮮学校があったことに気づいた（安元弁護士）安元弁護士にとって弁護団活動は、学生時代は意識しなかった光景さへも、その細部をより鮮明に映すものだった。そればかりか、弁護団活動を開始して以降、九州中高にたびたび足を運び、生徒たちが授業を受ける様子を見たり、学校関係者たちと話を交わすことと知り得た「朝鮮民族としてのアイデンティティを持つて生きる」在日同胞の生きざまは、彼にとって自分とは異なる境遇や背景を持つ人々への想像をめぐらせ、理解する「新鮮な経験」だった。

「正直、最初は教育内容の部分で違和感があった。けれど、僕が見たのはあくまで一面的なものだから、この感覚は当たり前だとも思った。同時に、ある意味日本人にとってそこに深入りするのとはタブーになっていくのかなとも。僕にとっては金君がいて、この事件に関わることになった以上、そこはタブーではなく、むしろちゃんと知らなくてはいけない。でも、内容を知れば、なるほどねとなる。なぜ肖像画を掲げるのか、それはこれまで朝鮮が朝鮮学校を経済的な面で支えたから感謝の意味が込められていると。この流れが理解できたし、理解するのには時間ばかりはなかった（安元弁護士）

次ぐ「朝鮮学校を支える会・北九州」の新会長に就任した。今もお負けないような事件でも、裁判となった場合は原告と被告に対し、勝ち・負けだけでなく結果が言い渡される。もちろんそこにグレーは存在しない。最高裁判決を待つ九州無償化裁判もまた、いずれどちらかの結果が必ず出る。しかし、今も続く民族教育擁護運動において、結果そのものとは別に大事な糧となるのは「裁判を通じ芽生えた新たなつながりと、そこでの一人ひとりの気づき」だ九州弁護団のメンバーは口をそろえる。現在九州では、無償化裁判のために組まれた同弁護団を、ヘイトスピーチや幼保無償



不当判決に対し、裁判所前でプラカードを掲げる九州中高生徒ら

化の問題など、民族教育権が尊重される環境を整えていくうえで、弁護士らが引き続き役割を果たす母体として継続していく話がなされている。

金敏寛弁護士は、自身が弁護士、卒業生、保護者として朝鮮学校に携わる立場で肝に銘じていることがあるという。

「たとえば、在日朝鮮人に対するヘイトスピーチは、ヘイトスピーチとして、いまこの現代に問題化しただけで、それは10年、20年、30年前に、ネット環境がこれほど発達していない時期においても、おそらく同様に存在した問題。ウリハッキョができてから今まで、日本社会における朝鮮学校の立場は何一つ変わっていない。高校無償化の実現を目指すとき、今後裁判という方法が完全にタマになって『高校無償化が実現されない』とはならない。僕たちは今もお負けないという気持ちで臨んでいるし、それは最高裁がどのような判断をしても、高校無償化を実現するまで変わらない（金弁護士）

またその一方で、組織離れや生徒数の減少など、民族教育の存続にもつながる同胞コミュニティの課題が

短編小説

道づれ

- 4 -

キム・ビョンフン



「娘さん、それはいったい何の卵ですか？」

「どうも私は彼女にきました。周りのものも好奇心にみちた眼差しで彼女を見つめた。するとどうしたことが彼女の顔がみるみるうちに真赤になった。彼女はあわてて缶の口にガーゼをかぶせると、ひもでしっかりとくくった。

「これ、何の卵の塩づけたい。……」

先刻パレーホールに興じていたのっぽの青年が大きな眼玉をくりくりさせながら後ろからのぞいていたが、ぶっくらぼうにこつきた。

「え？ 卵の塩づけですって!?……まあ……」

彼女はいかにもあきれたようにのっぽの顔を見上げながらこう言ったが、すぐまた顔を伏せると、耳まで真赤になりながら今にも消え入りそうな声で言った。

「ほんとうは、私……職員に……嘘をついたんです。……この缶の中には……鯉が5万匹も入っているんです……」

「え？ 鯉!?……」

「なに？ 5万匹も……」

「冗談でしょう!? 娘さん……」

周りのものはみなびくびくして口ぐちに言った。最後のことは娘の気持ちを大分傷つけたらしい。彼女は顔をきつと上げると立ち上がった。

「まあ、冗談ですって？ 鯉の子なんです。おとつい孵ったばかりで、まつ毛がぐいしくないんです……」

彼女は、まあ失礼な、とも言いたげな顔であたりの人びとを見回した。

「ほんとつかね？ じゃ、もう一ぺん見せてくれよ！」

「おれにも、のをさせてくれ」など言いながら皆は娘の方に近寄った。元来旅人というものは物好きなものである。

彼女はあわててまたその場にしゃがむと、缶の口を両手でかかえた。

「ええ、見せてあげます。だけど、皆さんに見せるわけにはいかないんです。まだ、小さいのでとても注意がいるのです。誰か一人が代表して、こちらのおじさんがご覧になったら……」

彼女は私のことを「おじさん」と呼んだ。まだ50にもとこないわたしのことを「おじさん」とは……。多分白いものがチラホラ見えるわたしの髪が、「おじさん」と呼ばれたものらしい。しかし、私は彼女のことばに文句を言っている暇はなかった。まず、私は、与えられた特典を大いに感謝しながら受けねばならなかった。私は彼女の隣に大急ぎでしゃがむと、彼女の開けてくれる缶の隅を息を殺してのぞいた。しかし相変わらず私には、半透明な水の他には何も見えなかった。

「水しか見えないね……」

「こう、かげにして、こっちの隅からよくのぞいてご覧なさい。そう、それから水の中の「カ所」を注意して見ると、ほら見えるでしょう？ おじさん……」